



独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業



本報告書は、2019 年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業「地域づくりに関わるコーディネーターの交流・研修事業」の助成を受けて作成しました。

2019 年度

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

地域づくりに関わるコーディネーターの交流・研修事業 報告書

地域づくりに関わる コーディネーターが たいせつにしていること

監修 高橋 誠 一

東北福祉大学総合マネジメント学部 教授



だれもが地域で普通に

特定非営利活動法人

全国コミュニティライフサポートセンター

本書の読み方

交流・研修事業のプロセスと見えたこと・たいせつなこと

本書は、本事業の大阪、福岡、東京、名古屋の4会場で開催した「地域づくりに関わるコーディネーターのための研修・交流会」（以後、研修・交流会）から見えたこと、たいせつなポイントをまとめました。

全会場で発表いただいた「託老所あんき・おばさん料理おいでんか」の実践からは、地域づくりを進めていくにあたってコーディネート機能とコーディネーターの役割の重要なエッセンスを数多く読み解くことができ、この実践をマンガ化し、解説を加えることで、よりわかりやすくお伝えしています。

さらに、各会場で登壇をいただいた各地域のコーディネーター、彼らを支える上長、行政、学識者、厚生労働省、農林水産省の担当者からも、この実践に照らし合わせて考えることができる貴重なアドバイスを数多くいただき、「ゴロク」というかたちで10-13頁に集約しました。

各会場では、グループワークの時間にも重きを置きました。席替えの時間を設け、同じ立場のグループだけでなく、違う立場の人たちと出会うグループをつくり、コーディネーターについての理解を深め合い、そのエッセンスを共有し合いました。その内容を、14-17頁にまとめています。

そのうえで、交流を通じて見えてきた提言をまとめ、事業に関わった運営委員とともに座談会を開催し、今後、ますますその重要性が問われるコーディネーターの近未来像から地域共生社会について、語り合ったものを収録しています。

目次	事業のねらい.....	1
	託老所あんき「おばさん料理おいでんか」のコーディネート物語 マンガ編...	2
	託老所あんき「おばさん料理おいでんか」のコーディネート物語 解説編.....	7
	登壇者ゴロク.....	10
	大阪会場.....	10
	福岡会場.....	11
	東京会場.....	12
	名古屋会場.....	13
	参加者によるグループワーク発表.....	14
	大阪会場.....	14
	福岡会場.....	15
	東京会場.....	16
	名古屋会場.....	17
	交流を通じて見えてきた「たいせつなこと」（提言）.....	18
	座談会「地域づくりに関わるコーディネーターとは」.....	20
	参加者の状況と交流・研修事業の評価.....	24
	地域づくりに関わるコーディネーターのための研修・交流会 プログラム...	28
	「地域づくりに関わるコーディネーターの交流・研修事業」開催日程・運営委員名簿	

2019年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

「地域づくりに関わるコーディネーターの交流・研修事業」

事業のねらい

運営委員長 高橋 誠一

(東北福祉大学総合マネジメント学部 教授)

誰もが住み慣れた地域で、つながりと生きがいをもって豊かに暮らすために、地域ではさまざまなコーディネーターが活躍しています。介護保険における生活支援コーディネーターや、社会福祉協議会の地域福祉担当者、ボランティアコーディネーター、総務省の地域おこし協力隊、集落支援員、わがまちをよりよくしようと活動する住民リーダーや商店主など、福祉に限らず分野を超えて、さまざまなコーディネーター（職）が存在します。地域づくりや地域福祉を考えていくうえで、コーディネーターは重要な担い手ですが、残念ながらそれらが連携し、特性を活かし、あるいは補いながら手を取りあって地域づくりを進めているという理想には、まだ近づけていないような気がしています。

5年前、生活支援コーディネーターが設置されましたが、それからどこまで取り組みが進んだかを考えると、地域の格差があるように感じます。一方で、自分たちの取り組みに自信が持てない、さらには、いまだにどう取り組んだらいいのかわからないという地域もたくさんあります。

こうした現状から、コーディネーターについて、広い視点を持って考えていかなければ、次の展開を見出すことができないのではないか、そして、地域づくりが進んでいる地域に学ぶだけではなく、今抱えている課題、自分たちの地域がもっている潜在的な力に対して、皆で広く考えていく場が改めて必要だと感じています。

本事業では、コーディネーターのあり方や役割の議論だけではなく、広い視点で議論をし、地域でともに支え合う「地域共生社会」の実現に向けて、多様なコーディネーターが交流し、また地域アプローチなどの具体的な手法や取り組みを学び合う場を全国4ブロックで開催しました。研修・交流会の開催をとおして見えてきた地域づくりに関わるコーディネーターへの気づきを、本報告書にまとめました。

おりしも、事業の期間中に、厚生労働省に設置された地域共生社会推進検討会から最終とりまとめがなされ、全世代に向けた地域づくりへの支援の重要性が打ち出されました。本報告書が、これからの地域づくりを担うすべてのコーディネーターに役立てていただければ幸いです。

託老所あんき「おばさん料理おいでんか」の コーディネート物語 マンガ編

託老所「あんき」

*「あんき」は「気楽」を意味する松山弁

中矢さん
とれたてだから
ばあちゃんたちに
食べさせるの

わあ
ありがとう！

今日の
お昼にするね

託老所「あんき」は
住み慣れた地域で
最期まで暮らし続けるため
1997年にスタートした
通所介護施設です

「その人の環境を崩さない」
ということに重きを置いているので
食事のメニューや
過ごし方も自由です

託老所「あんき」代表
中矢曉美さん

ある日のこと

もん
もん

Aさん
いつも
好きなものばかり
食べてるでしょ

あら
いつもうちでも
そうよ

一人暮らしだと
なおさら
そうね

玄関の前で会ったら
挨拶するし
仲良くおしゃべりも
するけれど

ドアを閉めたら
家にあがって
お茶を飲んだり
することもない

こんなに
親しくても
そういう地域に
なってしまった

みんなが 昔
食べてたものを一緒に
ワイワイ食べられる
ところがあったら
いいんだけど...









託老所あんき「おばさん料理おいでんか」のコーディネート物語 解説編

(託老所あんき・縁側プロジェクト代表 中矢暁美)

各会場で登壇いただいた皆さんの発言から、関連深い「ゴロク」を10～13頁にまとめています。あわせてご覧ください。

O……大阪会場 (10頁)

F……福岡会場 (11頁)

T……東京会場 (12頁)

N……名古屋会場 (13頁)



私は、「自分が嫁いだ地域の中で生ききりたい」と思い、愛媛県内初の宅老所を開設しました。「住み慣れた地域で最期まで暮らし続ける」という思いで、お年寄りを地域から離さず、その人をどのように支えていくかを日々、考えています。あんきに来るおじいさん、おばあさんには、みんな家があります。だから、**事業所を家にしてほしくない (O-6/10頁)**。「一時預ける場所」という思いを込めて、『託老所』としています。

あんきは、100年くらい前の立派な古民家で1997年にスタートしました。大学や地域づくりの先生の協力のもと、近所の人が気軽に立ち寄ることのできる「縁側のような場所」をつくろうと

試み、2000年に、ボランティアグループ「縁側プロジェクト」が立ち上がりました。

私は、自然発生した地域のコーディネーターです。**私自身が主導して「何かをやりましょう」ということはありません (O-3/10頁) (F-5/11頁) (N-7/13頁)**。ここでの鉄則は、「私は手伝うけれども、主人公にはならない。だけど、一緒に悩んだり考えたりする」ということです (O-9/10頁) (F-2/11頁) (N-9/13頁)。

2008年にあんきを建て替えました。あんきに通うある女性が、一人暮らしで、いつも自分の好きなものばかり食べている、と気づきました。ある人は、「玄関の前で会ったら挨拶するし、仲良くおしゃべりもするけれど、家にあがってお茶を飲んだりすることもない。こんなに親しくても、そういう地域になった」と話していました。**「みんなが昔食べていたものを、みんなでワイワイ食べられるところをつくろう (F-9/11頁) (T-6・T-7・T-8/12頁) (N-3・N-10/13頁)」**という人がいたことがきっかけで、「おばさん料理おいでんか」が始まりました。地域で、地域の人たち

ゴロク一覧

- O-6 制度やサービスを利用した受け身の生活が本当によい生活なのかを見直していく
- O-3 しかけないしかけ
- F-5 住民の主体性は勝手にできあがるものではない
- N-7 「必要だからやる」という気持ちに対して支援をする
- O-9 地域づくりに必要なのは、リーダーよりもコーディネーター

- F-2 狙ってつくらない
- N-9 住民の力を信じる
- F-9 コーディネートはプロセス
- T-6 安心してお互いがつながれる場が地域づくりにつながる
- T-7 一堂に会する場
- T-8 ご近所のささやかな支え合い、住民のニーズや声が形になるときに感動が生まれる
- N-3 対話と小さなチャレンジとネットワーク
- N-10 元気なうちからつながり続ける

の手で、地域の人たちがつくる、地域の郷土料理を食べてもらえるようなところです。「おいでんか」は、10人くらいの団地に住む女性たちが中心メンバーです。彼女たちは、「おいでんか」に来ると、1時間は話をして盛り上がります。**この10人の話を聞いているだけで地域が見えてくるし、私たちが地域の勉強をさせてもらっています(N-6/13頁)。**

このときに大事にしたのは、「1週間以内にやる」ということです。というのも、やりたい人がやりたいときに即刻やらないと、地域は冷めてしまうからです。私は、「来週やろうね。手書きでチラシをつくって、知り合いに配ればいいやん。3人か5人が来てくれればいいやん」と言いました。**言い出しっぺの女性は、徒歩10分ほどの団地に住んでいて、団地の知り合いにいろいろな相談をしていました(T-4/12頁)。**団地の人には、「500円をもらうけれど、試食に来ない？」と誘いました。**当日、集まってくれた7人に感想を聞いてみると、「懐かしい」「おいしい」「うれしい」「ここに来たらずっとしゃべってられる」と大好評でした(T-2/12頁)(N-1/13頁)。**今では50人ほどが集まり、毎回9品ほどをつくってみんな食べています。

この団地にAさんという女性がいました。もともと明るい性格でおしゃれでしたが、認知症になり、自宅にひきこもるようになってしまい、ご主

人もあまり外に出そうともしませんでした。でも、**同じ団地の人が、「おいでんか」にその女性を誘いました(T-10/12頁)。**1～2回誘っても来ませんでした。が、何回も誘ってみると、「ここまで何回も誘ってくれるなら」とご主人もしぶしぶ、「1回くらい行ってみたらどうや」と言い、来てくれることになりました。「おいでんか」では、昔話がとても盛り上がり、Aさんは「また行きたい」と言うようになりました。**地域の力・粘り、昔からのつながり(T-12/12頁)**が、Aさんを外に出すきっかけになったのです。

あるとき、声をかけたボランティアさんに、「**あなたたちはすごいコーディネーターやね(O-1/10頁)**」と話しました。最初は困惑していましたが、「当たり前のことやんなあ。隣が困っていたら、困らんように助けよう、っていつも中矢さんが言うことやん」と言われました。

Aさんは、みずから「週2回のデイサービスに通いたい」と言い、通うようになりました。団地組さんが日々気にかけてながら、見えない支援をしつつ、月1回の「おいでんか」の食事を楽しんでいました。団地組さんに「きれいなね」と褒められることを喜んでいました。しかし、7～8か月後、くも膜下出血で一晩で亡くなってしまいました。

そのとき、ご主人が「団地組さんが家内を連れ出してきてよかった。**家内が毎日笑顔で楽しみながら亡くなった(O-5/10頁)(N-8/13頁)**こと

- N-6 「場」とそこにコーディネーターが入っていく重要性
- T-4 すべて自分たちで解決しない
- T-2 つながりの輪を広げる
- N-1 楽しそうなところに人は集まる
- T-10 ニーズを見つけ出すのは住民
- T-12 地域づくりをするのは住民
- O-1 コーディネーターをつくるコーディネーター
- O-5 人は人と関わることで幸せを感じる
- N-8 その人の願いを実現する

- O-2 心を動かす
- T-3 その人の強みを見る癖をつける
- F-6 地域の状況をよく見て考える
- F-8 時間軸で見る
- F-10 わがまちらしさをどうやって維持していくのか
- T-5 そこにある力をどう活かすのかを考える
- F-7 何を目指すのかを考えて取り組む
- N-5 場づくりを工夫する
- T-1 職員を地域に解き放つ

で、僕も自分を許せると思った」「家内が亡くなったのは悲しいけれど、そこを救ってくれたのは地域の人だ。**僕が恩返しできるのは町内会長をやるくらいだ** (O-2/10頁)。家内がいなくて、恩返しできるのは僕しかないから」と話し、今、2期目を務めてくれています。

「おいでんか」に来る人のなかに、四国八十八ヶ所に毎年お参りに行くグループがあります。メンバーの中に、聴覚障害があり、普段は手話を使うBさんがいました。福祉の本を読んで勉強したり、大好きな編みものをしたり、いろいろなところで活躍をしてくれました (T-3/12頁)。

Bさんは、ご主人に先立たれてからだんだん鬱っぽくなり、「早く主人のところに行きたい」と話し、そのうち病気で亡くなってしまいました。病気だけでなく、気力がBさんの死期を早めたような気がして、Bさんの死に、「自分たちは何かできなかったか」と仲間たちは悩みました。

「Bさんが亡くなったことは悲しいけれど、今後、私たちがどう地域を紡いでいけばいいか、考えよう (F-6・F-8・F-10/11頁) (T-5/12頁)」と私は声をかけました。地域の人たちは、「**もっと本音が語り合えるような場をつくろう** (F-7/11頁) (N-5/13頁)。それが支えるってことだよ」という結論になりました。**地域の中で悩みを分かち合い、支え合い、一緒に地域づくりについて考えること** (T-1・T-11/12頁)、これは地域の宝だと思います。

ます。

専門職は、「地域にどうやって入ったらいかわからない」と言います。何をしているのかを聞くと、サロン訪問ばかりしています。「それだけではダメよ。サロンで広がる**個人的なお茶会を支援する必要がある** (O-4/10頁)」と言いました。大きな木でいう一本の白根、人間でいう毛細血管は、見えないけれど地域で大きな力を発揮しています。個人的なつながりが、この毛細血管のような役割です (O-8/10頁) (T-9/12頁) (N-11/13頁)。

地域の中では、いろいろなところで幅広く、小さな取り組みがたくさん行われています (O-7/10頁) (N-4/13頁)。そして、一番大切なのは、「**ちっちゃなこぼれ話**」をいかに誰がすくうのかということだと感じています。「こぼれ話」は雑談です。雑談の中にこそ、ものすごいお宝が埋まっています (O-10/10頁) (F-3・F-4/11頁)。専門職と勉強会を開き、雑談をしながら地域のこぼれ話をたくさん出してもらいました。友人関係で何気なく行ってきたつながりや支え合いが見える化し、褒め合いました (F-1/11頁)。自分たちのしてきたことがこんなに評価されるのかと地域の人には驚いていました。こうしたささやかなことをすくい上げて、潤滑油のように地域の中で循環させていく (N-2/13頁) のが私の役目だと思っています。

T-11 地域づくりは、土壌づくり

O-4 会議の場以外でも住民とコミュニケーションをとる

O-8 まずはつながりやすいところから地域とのつながりをつくる

T-9 丁寧に地域に足を運び、暮らしぶりを教えてもらう

N-11 つながることの楽しさを獲得する

O-7 まずは地域にあるものを応援する

N-4 住民として活動をしているか

O-10 地域との関わりを丸投げしない

F-3 いかに楽しむか

F-4 地域のつづやきを拾う

F-1 コーディネーターが孤立をしないように地域で一緒に活動する

N-2 住民からのこぼれ話をどう拾うのか

セミナー登壇者による発言のキーワード（語録）をひもとく
登壇者ゴロク（大阪会場）

●東北福祉大学総合マネジメント学部 教授 高橋 誠一

0-1 コーディネーターをつくるコーディネーター



地域住民に地域の中に存在している課題を投げかけて、みんなでそれを話し、きっかけをつくる。これこそが協議体だ。地域にもともといる「ちょっとおせっかいな人」が次の世代を生むコーディネーターでもある。

●宮田村（長野県）福祉課福祉係 係長 山下 孝一

0-2 心を動かす



宮田村では、地域のさまざまなコーディネーターを生活支援推進員と総称している。生活支援推進員が地域に出向き、聞かせてもらった話の肝は「心を動かされること」にある。報告を受けたり、住民向けの情報誌で発信する際にも、テクニックよりも「自分が心を動かされたこと」を伝えるように意識してもらっている。心が動くことで、人が、地域が動いていく。

●阪南市社会福祉協議会（大阪府）事務局次長

兼地域福祉グループ主任 猪俣 健一

0-3 しかけないしかけ



組織をつくるだけではうまくいかない。こちらから解決策は押しつけずに話し合いの材料や話し合いの場を整備して、住民が出した答えを信じてやっていく。取り組む中で、住民もワーカーも、普通のふれあいや誰かに感謝してもらえる経験をとおして、本物の喜びややりがいに気づいて成長する。

●福島市飯坂南地域包括支援センター（福島県）所長

（生活支援コーディネーター統括）齋藤 理恵

0-4 会議の場以外でも住民とコミュニケーションをとる



住民の暮らしのリズムに合わせて居場所や暮らしの中にお邪魔し、混ぜてもらうことで、自然でありのままの暮らしぶりが見えやすくなる。お茶飲みの場で聞いた名店の店主は防犯協会の会長で、地域の会議とは違った地域の話聞くことができた。住民の思いを引き出す場は会議の場だけではない。

●NPO法人とかの元気村（高知県）副理事長

兼コーディネーター 森田 有紀

0-5 人は人と関わることで幸せを感じる



集落活動センターと高知型福祉であるあったかふれあいセンターの母体となるNPOで、みんなが楽しいイベントを企画して地域のつながりをつくり、介護予防、あおぞら食堂、生活支援などに取り組む。「人を愛すること」「人に感謝すること」「人を頼って必要とすることで周りに自分が少しでも幸せを与えられたら、自分自身の喜びにもなる」をたいせつにできる地域づくりを目指している。

●宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）常務理事 佐藤 寿一

0-6 制度やサービスを利用した受け身の生活が本当によい生活なのかを見直していく



今までは家族や地域の力で乗り越えられてきたことが難しくなり、制度や仕組みで置き換える動きが進んできたが、それがますます隣近所との関わりを希薄にさせてきている。まち全体をどうしようかという視点で地域福祉を考え、福祉のなかに地域づくりという流れをどのように位置づけるかを意識する。

●厚生労働省社会・援護局

地域福祉課 地域福祉専門官 玉置 隼人

0-7 まずは地域にあるものを応援する



地域づくりを進める事業は、全国一律で仕組みをつくることを目指していない。まずは地域にあるものを活かし、充実していくことが大事。それで足りなければ、仕組みを生み出す基盤づくりをどう進めていくのかを考えるのがコーディネーターの役割。コーディネーター自身が何かをつくり出すのではなく、いろいろな人や機関と協働しながら地域づくりを進めていく。

●東近江市社会福祉協議会（滋賀県）在宅福祉課課長 眞弓 洋一

0-8 まずはつながりやすいところから地域とのつながりをつくる



まずは自分のつながりやすい人のところから関係をつくっていけばよい。地域の中で困難なケースにあたったとき、地域で受け止めてくれる関係性ができていないと自分がつらいだけになってしまう。自治会関係者や福祉関係者などだけとする地域づくりではなく、あまねく住民を対象とした暮らしのエリアでの地域づくりを目指す。

●中津市社会福祉協議会（大分県）地域福祉課 課長 吉田 瑞穂

0-9 地域づくりに必要なのは、リーダーよりもコーディネーター



コーディネーターには、業務として職につく場合も、地域で活動する住民のつなぎ手もある。専門職のコーディネーターは、そうした住民といかにつながり、参加してもらえる場をつくっていけるかが問われる。コーディネーター上手の特徴は「受け止めること」「振り上手なこと」で、そうした人のまわりにはいつも人が集まっている。場をつくることで、自分の気づきの幅が広がり、思いや活動を広げていくことができる。

●多賀城市（宮城県）保健福祉部 介護福祉課介護予防係

主幹兼係長 高橋 洋之

0-10 地域との関わりを丸投げしない



多賀城市では、2層の生活支援コーディネーターを地域包括支援センターに委託している。委託をしているが丸投げをするのではなく、地域にともに出向き、生活支援コーディネーターと一緒に悩みながら地域づくりを考えている。

セミナー登壇者による発言のキーワード（語録）をひもとく 登壇者ゴロク（福岡会場）

●多賀城市（宮城県）保健福祉部 介護福祉課介護予防係

主幹兼係長 高橋 洋之

F-1 コーディネーターが孤立をしないように地域と一緒に活動する



コーディネーターとともに、地域住民の営みに混ぜてもらったりしている。その中で見つけた地域活動も含めた発表の場を、年1回設けている。住民へのインタビューで活動理念を掘り下げ、コーディネーターが発掘した資源の発表という意味では、コーディネーターの晴れの場にもなっている。

●久万高原町社会福祉協議会（愛媛県）^{おもこ}面河支所 福祉活動専門員

兼第2層生活支援コーディネーター 西森 友紀

F-2 狙ってつくらない



人口が少なく、住民の役員も兼任が目立つ中で、新しいことを始めるのは厳しいと感じていた。以前から、セミナー開催、情報発信やお節介プロジェクト、秘密基地のような遊び場、特産品の烏龍茶づくりなどの場があったので、それらを合わせる形で面河地区地域運営協議会が立ち上がった。当初は困惑する人もいたが、地区を愛する人たちが意見を出し合い、地域づくりが進んでいる。

●一宮市地域包括支援センター（愛知県）コムネックスみづほ

主任ケアマネジャー兼第2層生活支援コーディネーター 谷口 正和

F-3 いかに楽しむか



通常業務に加えて、地域包括ケアシステムやまちづくりのために住民との貴重な交流をたいせつにすることをモットーにしている。住民に寄り添い、悩みに共感することから信頼関係ができる。自分たちが行うコーディネートという仕事にいかに関心を持つか。仕事感や負担感があると、地域になかなか入れない。住民との関係ができていくと、楽しめるようになる。

●NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝（大阪府）

事務局長 池谷 啓介

F-4 地域のつばやきを拾う



地域と丁寧に関わり、そのつばやきを実践につなげていく。「人が集まれる場所をつくりたい」という声からコミュニティカフェを開いたり、「子どもが使わない公園を花でいっぱいにしたい」というつばやきからワークショップを重ね、コミュニティ農園をつくったりした。ときにはスタッフも一地域住民として参加しながら、関係性を築いている。つばやき拾いは住民だけでなく職員にも必要。

●宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）常務理事 佐藤 寿一

F-5 住民の主体性は勝手にできあがるものではない



既存の会議で、「こういう実践をしてもらいたい」という規定路線を住民に追認してもらい、それを住民主体と言っているのか。会議の場で議論が起きて、出てきた答えをすべて受け止めて応援する。そこに主体性があり、それを形成する支援が必要だからだ。

●厚生労働省社会・援護局 地域福祉課 地域福祉専門官 玉置 隼人

F-6 地域の状況をよく見て考える



地域づくりには時間がかかる。新しい事業を検討するときに、一番たいせつにしなければならないことは、自治体でどういう体制をつくるか、どういう支援を行っていくかを、地域の状況をよく見て考えていくことだ。

●宮田村（長野県）福祉課福祉係 係長 山下 孝一

F-7 何を狙うのかを考えて取り組む



いろいろな事業があるが、国や県に報告するための事業をするのではなく、わがまちが何を狙って取り組むのかというその意味を考えることが大前提。考え、納得して進める。

●全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

F-8 時間軸で見る



今の子どもたちが年をとり、いずれ地域の担い手になったり、支えてもらう側になっていく。彼ら・彼女らがその年齢を迎えるまでにはこれから何十年かかるが、そのときを見据えて、時間軸という視点で地域づくりを意識しなければならない。

●東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授 高橋 誠一

F-9 コーディネートはプロセス



コーディネーターは、まずは住民が何に関心があるのかを知り、何をしたいと思っているかを理解することから始まる。住民から自然と自分たちの地域にこういうものが、という提案が出てくるまで寄り添い、一緒に考えていく。けっして生まれた結果だけを見て地域を評価してはならない。

●東近江市社会福祉協議会（滋賀県）在宅福祉課 課長 眞弓 洋一

F-10 わがまちらしさをどうやって維持していくのか



市町合併し、14の地域で懇談会をし、それぞれのわがまちらしい地域福祉活動計画をつくった。「少子高齢化のまちは消えてしまうのではないか」など、わがまちの今後が心配という声が多かった。高齢者の暮らしづらさの問題が大きい地区では、サービスの補完ではない、もともとある「お互いさま」の気持ちで生活支援サポーターが立ち上がった。

セミナー登壇者による発言のキーワード（語録）をひもとく 登壇者ゴロク（東京会場）

●松戸市（千葉県）市民部市民自治課参事監兼課長 宮間 恵美子

T-1 職員を地域に解き放つ



地域のことは地域のひとと一緒に取り組まなければならないはずだが、地域のことを知らない職員が多いと感じてきていた。特に、若い職員が地域に入り、地域のひとと語り、「この話ならば地域のこの人に聞けばいい」という信頼関係を築く機会をつくることが上司としての役割と考えている。

●合志市社会福祉協議会（熊本県）事務局長 齋藤 正治

T-2 つながりの輪を広げる



居場所ですつながった参加者の声をさらに拾うための茶話会を、地域の事業所や大学を借りて開催している。かしこまらずに気軽に集まってもらい、そこから有料老人ホームの食堂を借り、飲食やカラオケをしながら昔の音楽を楽しみ、地域のことを語り合う会が始まった。

●広島市基町地域包括支援センター（広島県）センター長 藤谷 周志

T-3 その人の強みを見る癖をつける



見守りネットワークと地域の達人（特技）を両面セットで登録してもらい、見守られるだけでなく、その人を地域の担い手として地域のためにできることを教えてもらっている。相談の主訴を解決することが専門職の役割ととらえがちだが、その人がこれまで何をしようとしてきたか、何ができていたのかという強みを見る、ストレングスアプローチの癖をつけ、相談者をリスペクトする。

●埴山学区住みよいまちをつくる会（茨城県）会長 西村 ミチ江

T-4 すべて自分たちで解決しない



世帯をまわると、たとえば高齢の親がひきこもりの子どもの面倒を見ているなどの場面に出くわす。丁寧にアプローチをすることはもちろんだが、これから始める地域食堂に巻き込めないか、などの案が住民リーダーから出てくる。行政や専門職から応援をもらいながら、知恵はあるところからもらえばいい、と周囲に呼びかけ、実現するための方法を常に考えている。

●東近江市社会福祉協議会（滋賀県）在宅福祉課 課長 眞弓 洋一

T-5 そこにある力をどう活かすのかを考える



地域に困っていることがあると、専門職は手助けをしなければという思いから「こうしたほうがいい」と言いがちだ。地域の困りごとを「たいへんだ」と騒ぐのではなく、そこにある人の力、まちの力にスポットを当て、それをどう活かすのかを考える。地域住民から教わり、住民に頼る。住民はあてにされていくことで力を発揮し、地域の力が伸びていく。

●厚生労働省社会・援護局 地域福祉課生活困窮者自立支援室 企画調整専門官 國信 綾希

T-6 安心してお互いがつながれる場が地域づくりにつながる



興味関心から始まるまちづくりが、人や暮らしを中心に据えたまちづくりに変わっていくときに、出会いや学びが起きる。ほかの人とよりよくつながるためには、自分の地域をよりよくしていくためには、と探索する過程で地域づくり、まちづくりに発展し、その結果、活動に発展することもある。

●農林水産省大臣官房政策課 課長 山口 靖

T-7 一堂に会する場



農福連携が進められてきているが、こうした輪をいろいろな分野に拡張していくことで地域の課題を解決できる場になる。いろいろな団体、人たちが一堂に会する場は、中核になってくれる人がいないとうまくいかない。お互いの経済的課題、地域課題、福祉課題を総合的に学び合うプラットフォームのような空間が必要だ。

●宮田村（長野県）福祉課福祉係 係長 山下 孝一

T-8 ご近所のささやかな支え合い、住民のニーズや声が形になるときに感動が生まれる



コーディネーターが地域から聞き取ってくる、ささやかで具体的なご近所同士の支え合いが自分たちの地域にあることにも感動する。補助金も行政からのサポートのないなか、住民の声やニーズが形になっていく姿に感動が生まれる。

●全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

T-9 丁寧に地域に足を運び、暮らしぶりを教えてもらう



地域に出かけていくことも、地域に混ぜてもらうことも重要だが、数回、数十分程度の滞在では教えてもらえる関係にはならない。何度も足を運び、地域に混ぜてもらい、少しずつ信頼をしてもらい、生活文化を教えてもらう。本当にたいせつな仲間はどのような人なのか、どんなときに支えてもらっているのかは、何度も訪ねなければ見えてこない。

●宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）常務理事 佐藤 寿一

T-10 ニーズを見つけ出すのは住民



地域でさまざまな活動が生まれ、それが進めば進むほど、課題を見つけ出す地域の力が高まっていく。そこからつながってくるものを専門職がどう受け止めるのか。制度にないから、と入り口でシャッターを閉じてしまっは、住民と専門職との信頼関係が薄くなる。住民が見つけてきたニーズを専門職が受け止めることで、住民の見つけてくる力がより広がってくる。

●東北福祉大学総合マネジメント学部 教授 高橋 誠一

T-11 地域づくりは、土壌づくり



地域の課題解決と言うが、ベースの地域がなければ、地域での課題解決にはならない。地域づくりとは、土壌づくり。土壌を耕してこなかったために、現在は孤立などの課題が生まれてきている。昔は地域でできていたことが、今は自分たちだけでは難しいこともあるが、そこを少しサポートすることで、まだまだ地域に力があることがわかる。

●中津市社会福祉協議会（大分県）地域福祉課 課長 吉田 瑞穂

T-12 地域づくりをするのは住民



住民が地域づくりを行うために、コーディネーターは調整力を身につけることが必要。専門職が地域に出向くときに手法ばかり気かけたり、課題を投げかけたりしてしまうと地域はマイナス思考になる。地域にあるもの、地域のいいところに注目する目線を持ち、地域に出て行くことが重要だ。

セミナー登壇者による発言のキーワード（語録）をひもとく 登壇者ゴロク（名古屋会場）

●東近江市（滋賀県）総務部まちづくり協働課 主事 溝江 麻衣子

N-1 楽しそうなところに人は集まる



月数回、地域の活動に楽しく参加しながら住民とおしゃべりを楽しんでいる。その背景にあるものを理論づけ、活動に自信を持ってもらい、報告を提出している。理論づけは、地域が安心して活動するためのテクニックと考え、センスや言葉を身につけるために、自らも学ぶ機会をつくっている。

●文京区社会福祉協議会（東京都）地域福祉推進係

地域連携ステーション（フミコム）係長 浦田 愛

N-2 住民からのこぼれ話をどう拾うのか



住民に相談ごとを尋ねても「何もない」と言われるが、愚痴を聞いてみるといろいろな情報を得られる。そこを専門職とつなげて連携した支援を行う。コーディネーターは、個別支援と地域支援の両方のネットワークが必要で、この2つのネットワークを行き来しながら日々実践に取り組んでいる。

●肝付町（鹿児島県）福祉課参事兼包括支援係長 保健師 能勢 佳子

N-3 対話と小さなチャレンジとネットワーク



「補助金や助成金があるからやってください」という問いかけでは続かない。対話とチャレンジとネットワークができたものには、お金が必要になる。そのお金をどうやって工面して、サポートするかが行政の大事な役割である。

●NPO法人すずの会（神奈川県）代表 鈴木 恵子

N-4 住民として活動をしているか



専門職は「住民の目線となって考える」と言うが、自分自身の地域のために住民として活動をしているだろうか。自分が地域の住民ならば何が必要なのか、地域の人たちが訴えていたことはどういう意味かを、専門職としてだけではなく、ぜひ自分のこととしてもとらえてほしい。

●中津市社会福祉協議会（大分県）地域福祉課 課長 吉田 瑞穂

N-5 場づくりを工夫する



地域づくりに関わるコーディネーターには、地域や立場が違って、場づくりの工夫という共通性がある。居場所づくりだけでなく、話し合う場、学ぶ場、いろいろな形の場をさまざまなメンバーが、そのときそのときで工夫をしながら場づくりをしている。

●厚生労働省社会・援護局 地域福祉課生活困窮者自立支援室

兼地域共生社会推進室 室長 吉田 昌司

N-6 「場」とそこにコーディネーターが入っていく重要性



地域住民が楽しく生きがいとしてやっていることを意味づける活動を広げ、そこに新しい事業を使っただけであれば。場づくりとコーディネーターはセットであり、場にコーディネーターが

入って関係性をつくることが重要だ。そのためにはまず地域の既存のつながりを把握し、既存の場を盛り上げたり、新しい場づくりに尽力してほしい。

●宮田村（長野県）福祉課福祉係 係長 山下 孝一

N-7 「必要だからやる」という気持ちに対して支援をする



「補助金があるから」「数値や評価のためにこんな事業をしてほしい」という押しつけから始まる取り組みは、地域の必要性に裏打ちされたものではない。地域住民の「必要だからやる」という気持ちを支援するため、コーディネーターが地域で接した意見、視点をどう活かすかを大事にしている。

●全国コミュニティライフサポートセンター 理事長 池田 昌弘

N-8 その人の願いを実現する



ある地域で、退院後の在宅生活は難しいと言われた男性がいた。男性は畑が好きで、「毎日畑にいたい」と、友人と一緒に畑仕事をした。家族は不安からデイサービスの利用などを地域包括支援センターに相談した。担当者と生活支援コーディネーターは、長靴を履いて畑に行き、一緒に畑仕事をしながら話を聞き、「畑で人生を終えたい」という思いを実現するほうがいい」と、畑仕事を介護保険制度にはないデイサービスとして応援することにした。

●宝塚市社会福祉協議会（兵庫県）常務理事 佐藤 寿一

N-9 住民の力を信じる



専門職の目線から見ると、できていないことや間違っていることもあるかもしれないが、住民はその地域の生活のプロである。地域住民の関係のなかでは、専門職にはわからないしがらみもある。思ったように進まないから「できていない」と思うのではなく、住民の力を信じて待つことも必要だ。

●東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授 高橋 誠一

N-10 元気なうちからつながり続ける



現在の介護保険では、一度サービスを使い始めると利用を増やしたほうが自分も家族も安心、という状況になってしまい、まだまだ地域で暮らせても、地域とのつながりが断ち切られて暮らし続けられないような仕組みになっている。それを補うために、元気なうちから地域とつながり、関わりを続ける。

●東近江市社会福祉協議会（滋賀県）在宅福祉課 課長 眞弓 洋一

N-11 つながることの楽しさを獲得する



まずはコーディネーター自身が日々の相談相手、地域住民など内外とつながり、その楽しさを獲得する。それを少しずつ広げていくことで、さらなる住民や理解者との出会いがあったりする。そのような中から、住民と専門職がつながるヒントも見えてくる。

参加者によるグループワーク発表 ＜大阪会場＞

気づいたこと

- ・今ある資源を活かす、どうつなげるか
- ・心が動くとは動く（感動）
- ・見える化→住民に見せる
- ・住民の話（つぶやき）をどう聞か
- ・住民の中に入っていくための関係づくりのためには、地域に細かく出向くことや顔を合わせていくことが重要
- ・専門職がまず楽しむ
- ・地域に出向き、住民の話を聞き、地域づくりを進めたい
- ・福祉だけでなくまちづくり
- ・地域の文化を重んじる
- ・制度や法律からではなく、人は楽しいことや幸せを感じることで動く
- ・地域の住民が専門職
- ・生活支援コーディネーターは自分も地域の一員、地域のこぼれ話をつなぐ
- ・住民に活動をフィードバックすることのたいせつさ
- ・住民と一緒に感動すること（心が動く⇒体が動く）
- ・困りごとを聞いても反応がないが、特技などを聞くとたくさん話が出る
- ・地域の人の力とそれを信じる力
- ・住民を信じる（しかけないしかけ）
- ・おもしろみ・楽しさ・喜びがつながった形で人を集めないと広がらない、つながらない
- ・相手の目線に立つ
- ・住民としての視点のたいせつさ（五感のたいせつさ）
- ・いかに聞く（聴く）耳を持てるか
- ・行政との関係性、方向性 お互いが話をするたいせつさ
- ・組織化にのみこだわらず、「個」を見たい

コーディネーターに求められること

- ・担当地域に溶け込むこと 現場100回
- ・住民のやりたいことに寄り添う
- ・住民のパワーを信じきる
- ・住民側に立てる環境（組織）づくり
- ・「できない」と言える力
- ・ジャンルの違うコーディネーターとの交流
- ・地域に出ることを楽しむ。楽しく出かけられる職場や仲間の理解
- ・職場のお宝探し。一人で頑張りすぎない
- ・地域の住民の声を拾って受け止めてくること、そして視覚化、言語化すること
- ・住民の一言に気づく力
- ・職場内の情報共有
- ・地域に出る時間の確保。仕事の簡素化・効率化を図り、地域に出ることを意識。
- ・課題解決＝一緒に考えるというスタンス 人の生活すべてを解決できない
- ・地域のこぼれ話を聞いていき、それぞれが拾ってきたことを職場内で共有
- ・まず文化を知ること＝地域を知ること
- ・地域が動くタイミング、気づきなど、アンテナを張っておき、うまく地域に入る能力
- ・コーディネーターの活動をよりわかるように伝えるために、活動すること
- ・サロン後の雑談など、ニーズキャッチをすることができる場のつくり方
- ・前向きさ、楽しみながら、ワクワクできるか
- ・住民の方々のつなぎ手（仲介のような役割）
- ・住民の方々の思いをいかに応援できる・引き出せる人柄
- ・いろいろなことに興味を持つこと
- ・問題の本質をつかむ
- ・諦めない



参加者によるグループワーク発表 ＜福岡会場＞

気づいたこと

- ・若い世代を取り込む
- ・つぶやきを拾う
- ・地域に出向く（目的を持って、住民との信頼関係を築く、ニーズの把握）
- ・多職種との連携
- ・主体性について
- ・「活動」の指標、見せ方
- ・「住民主体」進めていくうえで、住民の立場になって考える
- ・高齢者だけではなく、子どもや若者を巻き込んだ地域づくり
- ・今ある社会資源を生かしてマッチング。社会資源を知る
- ・発表者が皆前向き！困りごとをきちんと拾い、住民と一緒に解決する熱いワーカー
- ・コーディネーター同士のつながりのたいせつさ
- ・地域に溶け込むこと
- ・「こぼれ話から拾っていく」具体化するまでのプロセス
- ・「小さな話を見つける」言語化することを補助していく
- ・「主人公は住民」住民自身が主人公であることをどうやって意識してもらうか
- ・多世代交流
- ・共生社会の理解、若い世代を巻き込む
- ・縦割りの解消
- ・地域に出て、「ひとこと」を聞き取っていききたい
- ・地域の「こぼれ話」課題把握
- ・仲間づくり
- ・つぶやきに耳を傾ける
- ・4層、5層について（生活支援コーディネーターと住民との交流）
- ・ネットワークづくりの方法

コーディネーターに求められること

- ・人のことが好き。人に興味関心を持つ。「何しに来たの？」
「また来たの？」と言われるくらい人懐っこいコーディネーター
- ・コーディネート力。人と人をつなぐ、自分も人につながる、言葉としてまとめる
- ・伝える力、言語化する力
- ・プロデュース力。資源を知っている、知ろうとする。目的が何かわかっている。情報の見える化、求心力を持つ人が見えている
- ・コミュニケーション力。話す力、聴く力。人と関わるができる
- ・任せる力。任せられる人を見つける、育てる（引き継いでも続けていける）
- ・変化に対応できる力
- ・地域・社会・企業・行政（地域資源になりうるものすべて）とのつながり
- ・情報・ツール
- ・楽しむ
- ・人間力UP
- ・伝える力（行政に伝えていく→数値等も含めて）
- ・フットワーク力（地域に出向く、ニーズ・つぶやきを拾う）
- ・ネットワーク力（信頼関係、住民と住民、住民と専門職、専門職と専門職）
- ・根拠のあるデータを説明するなど専門性もたいせつ
- ・地域の実情（今までの流れ、経緯）がわかるようになるくらい知ることがたいせつ
- ・住民の目線で同じ立場に立ち信頼関係を築く
- ・自分の組織が連携していないとチームで動けない。社協職員が全員コーディネート業務を視野に入れて連携をとる



参加者によるグループワーク発表 ＜東京会場＞

気づいたこと

- ・困っていることに目がいきがちだが、今あるものにスポットを当てて活用していくことがたいせつ
- ・住民を信じ、待つことのたいせつさ
- ・住民自身が自分たちの行動を振り返るきっかけづくりを
- ・足で歩いて（自転車OK）情報を得る
- ・地域のことは地域の人たちが主体である
- ・地域の人たちと語って学ぶ
- ・住みやすいまちにしたいと思っているのは行政も社協も同じ思い
- ・「住民に育てられて保健師になる」を思い出した
- ・やる気は生きもの
- ・地域を知らないと始まらない。地域の特性を見てのアプローチ
- ・相談支援事業の窓口が一つになっていることに驚いた。地域づくりにおいて重要なはず
- ・しかけるのではなく助けてもらうスタンス
- ・想いがあり、スピード感を持って実行に移す。住民が楽しめることをやるのがたいせつ
- ・次世代は橋渡し世代
- ・地域の自発性を引き出すことが大事だと気づいた
- ・困りごとと困りごとを掛け合わせるとチャンスが生まれる
- ・地域の人に困っていることを相談してみるという視点
- ・達人カード（弱みを強みに変える視点）を参考にしたい
- ・今あるものの強みを活かす

深めたいこと・聞きたいこと

- ・福祉だけではなく、多世代をととした生活支援体制の整備が必要
- ・住民主体を進めていくためには押しつけにならない
- ・今ある小さな単位のグループを一つでも多く把握できたらいい
- ・自立支援がわかった。当事者支援だけでは成り立たない
- ・ゆるやかなつながりへ、地域の理解へ
- ・うまく制度を使えるようになる。活用していく
- ・心が動くものを大事にする
- ・サービスをつくっても、住民の関係性が崩れない仕組み
- ・専門職が思う課題と住民が思う課題が違う可能性がある
- ・これからの共生社会が求められてくる
- ・いろいろなつながり、地域で暮らしている人たちのつながりが必要
- ・地域に出て調査しなければ、資源や課題は発見できない
- ・主体は地域。出会いの場をつくっていく
- ・「やったことが地域にとって本当に必要かどうか」ということにハッとした
- ・資源を「つくりだす」ことが、これまで地域にあったものを消してしまうこともある
- ・1～2年ではなく、10年スパンで地域を見ていく必要がある
- ・地域づくりとは、仕組みをつくるものではなく、地域の力を引き出していく
- ・住民からわき上がったことを形にすることが生活支援コーディネーターの役割
- ・地域にもともとある、生活の中でのお互いの助け合いを支援する



参加者によるグループワーク発表 ＜名古屋会場＞

気づいたこと

- ・集まっている場所の把握（居場所になりうる）
- ・自己満足にしない地域の取り組みを紹介
- ・新しい活動が、“今”必要なのか、様子を見ながら進めることも必要
- ・地域づくりは信念と熱意と根気
- ・住民も制度を知り、関わっていく
- ・困りごとより今の生活を聞くことが必要！！
- ・地域（現場）へ向う
- ・コーディネーターとしてのビジョンをしっかり持つことのたいせつさ
- ・その人の工夫、努力を聞く
- ・地域に出て行く（つながる、関係をつくる、伝える、勉強する、ネットワークを広げる）
- ・こぼれ話をたいせつに
- ・地域を知ること
- ・会って話してつなげること（茶話会こそ大事）
- ・場に来られない人へのアプローチが必要
- ・関係性を深めるために何度も足を運ぶことで情報を仕入れて地域を知る
- ・課題ではなく、良いところを見る。目を向ける
- ・行政、社協、住民が繋がらないと地域づくりはできない
- ・コーディネーターはつなぎ役、実際に取り組むのは住民
- ・地域資源をよく知ることが大事（その資源が地域でどういう役割があるかも知る）
- ・不便を聞くより、できていることを聞く
- ・その人の本質を見て価値観や固定観念を横に置いて話を聞く
- ・住民が自然に集まっている地域の居場所があることを知ることが大事

深めたいこと

- ・現場と制度のミスマッチ。どのように進めていけば上手に地域づくりができるか？
- ・国、市の助成事業を受けることで、どのような点で活動しやすくなるか？
- ・コミュニケーション（心理学）の応用を学べるとよい
- ・ワンチームになるための会議以外の取り組みは
- ・断らない相談体制はいつまでに整備するのか
- ・共生社会は包括・社協・民生委員・地域が取り組んでいるが、どうまとめるのか
- ・民生委員の立ち位置が薄いのでは？
- ・いろいろなコーディネーターがあるが、それぞれの内容、仕事がわかりにくい
- ・断らない相談支援の担い手は？
- ・家族の巻き込み方（生活支援）コミュニケーションの取り方
- ・地域共生をみんなでどう進めるか
- ・自分のこととして、どうとらえていくか
- ・活動をどのように地域に浸透させるか
- ・住民としての自分は何ができるのか
- ・持続性のある組織づくり
- ・複雑化していく問題にどう対応していくか（知識…）
- ・寄り合うなど、数字に表れないものをどう評価していくのか
- ・「総合相談」という入り口。入口ばかりつくりすぎではないですか
- ・「伴走型」と「住民の気づき」の具体的な関係性。特にコーディネーターの関わり方
- ・サロンに新規メンバーを引き入れるための方法



交流を通じて見えてきた「たいせつなこと」（提言）

東北福祉大学 高橋 誠 一
宝塚市社会福祉協議会 佐藤 寿 一

1. 地域づくりに関わるコーディネーターの行う支援のプロセス

（1）地域アセスメント

- しっかり見る、聴く
- つぶやきを逃さない
- 人とそのつながり
リーダー、パートナー、ちょっと気になる人、つながっていない人
- 社会資源
人が集まる場所（集会所・焦点・畑）
世話焼きさん
お宝（住民同士のつながりや気にかかけ合い、支え合いなどの生活の工夫）

（2）信頼関係をつくる

- 主人公は地域の住民
- やってみようの思いに寄り添う

（3）話し合いの場をつくる

- 課題やお宝の意味付け
- 課題やお宝の共有

- 人と人、人と資源をつなぐ
- 一緒に学ぶ
- 住民主体で進めるためのワーカーの運営支援（発言の引き出し、意味づけ、見える化等々）

（4）計画化と実践

- 協働の場をつくる 一緒に知恵を出す
- 居場所づくり
- 出番づくり・役割づくり
褒められる 人の役に立つ
- 専門職のネットワークづくり（タテ割りにならないように）と主体である住民との協働

（5）PDCAのサイクルをまわす

- 活動の展開の見守りと適切な運営支援
- 活動することで次々と新しい気づきがある
- たいせつなことは皆で話し合うこと



2. 地域づくりにかかわるコーディネーターの極意

（1）まぜてもらおう

- 地域の活動や普段の暮らしの中に混ぜてもらおう

（2）見つける・意味づける

- 地域の人財、資源を見つける
- すでにある住民同士がやっていること（お宝）を発掘し、意味づけてわかりやすく伝える



(3) しかけないしかけ

- ワーカーが引っ張らない、こっちの枠組みに引き込まない

(4) 住民・生活者の視点で見る

- その地域の生活のプロは地域住民
- 生活全体を見る、専門性で切り取ってみない

(5) 住民の力を信じる

- できることを奪わない
- 皆でやればできる。だからじっくり待つ 引っ張らない

宝塚市社協の実践から見えてきたこと

1. 話し合い・活動の場づくりのプロセスからわかること

(1) 住民活動の展開には話し合いの場が不可欠

- ・課題や現状、お宝の共有、対応の検討の場として

(2) 話し合いの場づくり、活動の展開には時間が必要

- ・結果を急ぐと支援者側の枠組みに引き込むことになる

(3) 住民の活動範囲に合わせたエリア設定

- ・小学校区もしくは自治会範囲が望ましい
- ・課題、活動の内容に合わせたエリア設定

(4) 地域づくりの主役は当事者や住民

- ・その地域の生活のプロは地域住民

(5) 支援者のスタンス

- ・長期的な視点をもち、支援者側の枠組みを押し付けない

- ・住民主体で進むような万全の準備(資料・参加メンバー)と適切な運営支援

2. 住民と協働する専門職として忘れないでほしいこと

○住民はその地域の生活のプロである

- ・住民から学ぶ姿勢

○問題を自分の専門性の範囲で切り取ってみない

- ・課題、問題は生活者の視点でとらえる
⇒ 生活課題は複合的で重層的

○住民を資源として使うのではなく、住民に使ってもらえる専門職に

- ・地域生活の主体者は当事者である住民である

○情報提供を受けたときにはきちんと返す

- ・情報の共有は協働の基礎

○住民の力を信じる

座談会 地域づくりに関わるコーディネーターとは

出席者

委員長	高橋 誠	一	■	東北福祉大学総合マネジメント学部 産業福祉マネジメント学科 教授
委員	高橋 洋之	二	■	宮城県・多賀城市保健福祉部介護福祉課介護予防係 主幹兼係長
委員	山下 孝	一	■	長野県・宮田村福祉課福祉係 係長
委員	眞弓 洋	一	■	滋賀県・東近江市社会福祉協議会 在宅福祉課 課長
委員	佐藤 寿	一	■	兵庫県・宝塚市社会福祉協議会 常務理事
委員	中矢 暁美	一	■	愛媛県・託老所あんき・縁側プロジェクト 代表
委員	吉田 瑞穂	一	■	大分県・中津市社会福祉協議会地域福祉課 課長
委員	池田 昌弘	一	■	全国コミュニティライフサポートセンター 理事長

収録：2020年2月1日土 全国コミュニティライフサポートセンター 京都事務所（京都市南区）

交流・研修会を振り返って

高橋誠一（以下、高橋せ） 今日、運営委員の皆さんにお集まりいただき、ありがとうございます。「地域づくりに関わるコーディネーターの交流・研修事業」ということで、約9か月の間、皆さんのご協力をいただきながら事業を進めてきました。

まずは、大阪、福岡、東京、名古屋の4会場で開催した研修・交流会について、ご意見をお聞かせください。

中矢暁美（以下、中矢） 地域づくりに関わるコーディネーターは皆、迷ったり不安があったりしていると思います。私が託老所あんきを始めたとき、愛媛県内にはこうした事業所がほかになく、いつも不安を抱えていました。こうした研修・交流会をとおして、誰かとつながり、お互いに共感をしながら、自分の立ち位置を確認できたことの意味は大きいと思います。

眞弓洋一（以下、眞弓） 研修・交流会ではグループワークに入り、参加者ともいろいろな話をしました。そのなかで、そもそもこの研修・交流会が「地域づくりに関わるコーディネーターの『ための』」、つまり、自分たちのためのもの、と

いう意図が参加者に伝わったことを感じました。普段からの研修では、「要支援者のための」など、主体が事業対象者で、内容は方法論でした。そこが今回の研修・交流会と大きく異なっていたところで、自分たちが分かち合い、当事者として支援をされる、というプロセスを体感された人が多かったように思います。ただ、残念ながら開催要綱からそこまでを読み解くことが難しかった。今回の参加者からは、「こうした研修なら、もっと仲間を誘ってくるべきだった」「こうした研修がほしかった」という声が聞かれました。

異分野も含めたネットワークをつくることを課されている人は、他者と連携することでどんなことができるようになるかを求めてきていると思います。鼎談ではモチベーションに訴えかけ、事例報告では先進地に学び、グループワークでつながりをつくる。そういう意味でも、分かち合いから学び合いまでいろいろなニーズに応えられるプログラムだったと思います。

高橋せ 伝え方も重要です。今回の研修・交流会では、「続けることで見えてくるビジョン」という展開も意識しました。「ここのスタートに並んでください」と言われる研修ではなく、自分のスタート地点を見つけるヒントという伝え方と、交

流を合わせたグループワークで共有する時間がとれたことも良かったと思っています。

吉田瑞穂（以下、吉田） 大阪、東京、名古屋の3会場に参加しました。夏の大阪会場の開催翌日に運営委員会を開催し、その気づきを福岡で、さらに東京、名古屋の運営に活かし、徐々に変化をしていきました。回を重ねるごとに内容が整理されていき、とても意義があったと思います。

池田昌弘（以下、池田） 4つの会場で開催をし、その中で、組織や上司の課題も見えてきました。現場で地域づくりに関わるコーディネーターがいくら学んでも、コーディネーターだけでは実現していきません。委託元、上司、組織と一緒に取り組んでいくには、どうすればいいのか、ということ伝える必要性もあります。

山下孝一（以下、山下） 一職員が個人でできることには限界があり、職場の上司の理解が進まなければその先に進めないこともあります。個人で

地域と向き合うこともたやすいことではありませんが、組織内で上司に理解をしてもらう難しさを抱えている自治体もあると聞きます。そのような自治体を応援したくて、「地域支え合い推進員（生活支援コーディネーター）が活躍できる環境をつくるために心掛けていること」に重きをおき、「チームによる話し合い」「人の心を動かす活動」を重視する宮田村の取り組みを発表しました。（図表1）

高橋洋之（以下、高橋ひ） 多賀城市では、協議体を円滑に進めるためにも、生活支援コーディネーターの「やる気」を尊重し、自主的な発案や活動を積極的に支援してきました。「後方・側面支援」ではなく「伴走型」の支援を目指していることをお伝えさせていただきました。（図表2）

眞弓 宮田村と多賀城市には、まちづくり、わがまちがどう生き残り、つないでいくのかということに行政がしっかりと関与されているストー

<図表1>

【聴くべき(活かす)意見の力関係】

住民 > 地域支え合い推進員 > 事務職(上司)

【地域支え合い理解の進む方向】(共感者を増やす動き)

事務職(上司) = 地域支え合い推進員 → 支援者(専門職) → 住民
(両者はチームとして情報共有)

<図表2>

伴走型の支援例

①生活支援コーディネーター連絡会議の開催(毎月)

他のエリアのコーディネーターとともに定期的に情報交換・情報共有する場をつくり、他エリアの先行事例を取り入れたり、互いに補完し合うことで、多賀城市全体の地域づくりに活かせるよう取り組む

コーディネーターからの提案は積極的に採用

【事例】それぞれの協議体にコーディネーターが参加する「交換研修」を実施
社会福祉協議会の職員も連絡会議に参加してもらうこととした

②各生活支援コーディネーターとの協議体の事前打合せ

生活支援コーディネーターが協議体を進めやすくできるように、事前打合せを実施
(生活支援コーディネーターからの求めに応じて必要の都度、開催)

住民への事前説明やチラシ配布、地域資源の取材等にも同行

③外部アドバイザーの活用

協議体を実施する中で生じる生活支援コーディネーターが抱える悩みを少しでも解消するため、宮城県社会福祉協議会が実施している「生活支援アドバイザー派遣事業」を活用し、定期的に勉強会を開催(生活支援コーディネーター連絡会議で活用)



事業を活用して生活支援コーディネーター連絡会議にアドバイザーを派遣



交流研修として中央エリアで立ち上げたサロンに各地域のコーディネーター、社協職員も参加



リーがあります。介護予防のため、という理解だけではサービスづくりになってしまいます。その先にある、まちのつながりづくりを見ているか。行政や上司には、その視点が必要ですね。

佐藤寿一（以下、佐藤） アンケート結果からも、参加者は、福祉に携わる経験、コーディネーター業務の経験のどちらも短いことが見てとれます。この業務のために新規に雇用をされた人も多くいるのではと思います。そうした人たちと、上司や先輩がこうした研修と一緒に参加し、地域づくりに対してのベースを丁寧に積み上げていく流れが必要です。

いろいろな研修がありますが、地域にどう関わるかをきちんと伝えている研修はありません。どの会場でも、「地域にどう入っていけばいいのかわからない」という声が上がりました。異なる分野があり、地域へのアプローチは異なっても、どう関わるかという基本は同じ、という認識をもってもらえるといいのかなと思います。

高橋ひ こうした交流・研修事業を続けていくことは大事ですね。今回参加をした方のフォローアップもしていきたいところです。受講して、地域に出かけてみてどんな変化があったのかを追跡調査し、検証することも必要です。上司に向けたプログラムやステップアップしていけるような研修もあるべきですし、その必要性が伝われば、参加者も増えると思います。

山下 今回、都道府県行政や社協の担当者からの参加が少なかったことは、現場に下していること

で都道府県域では見えづらくなっている部分があるのではと思います。

眞弓 コーディネーターが短命では、地域づくりはできません。こうした研修を継続させ、今後は最初の年の参加者に地域に向かう視点を話してもらおうようにするなど、育成プログラムを視野に入れて展開できるようになればと思います。

地域共生社会の実現に向けて

高橋せ 地域共生社会の実現に向けて、お話を伺いたいと思います。地域づくりのコーディネーターは、福祉の分野だけではありません。そうした分野を超えたコーディネーターとどう連携ができるのでしょうか。

高橋ひ 高齢者支援や自立支援などの窓口がありますが、地域共生社会が大事だといっても具体的な体制をつくっていかなければ、現場は疲弊します。コーディネーターが各自でつながってなんとかしてね、ではなく、最初の段階は行政が場づくりを進めるなど、コーディネーターがいろいろな部署とつながりやすくなるように力を注ぐ必要があります。そのうえで、コーディネーターの皆さんに、地域共生社会の実現に向けた取り組みが始まる時代が来ていることを理解してもらうことを進めていきたいと思っています。

佐藤 地域共生社会とは奥深いのに、その理念統一がされずに言葉だけが一人歩きしている印象です。

社協組織で言うと、まずは組織内部の連携です。生活支援コーディネーターなど、地域づくりに関わるコーディネーターが、組織内でどこまで認知されて、横につなげる能力があるのか。その連携ができていない状況では、外に向かって力を出せるはずがありません。

眞弓 生活困窮者自立支援の現場で、他分野、企業、事業所などと仕事をどうつくろうか、地域の居場所をどうするか、ということを地域の人と一緒に考えて実践してきました。生活支援体制整備

事業の延長で地域共生社会に取り組もうとすると、高齢者のケアに障害者を加える程度の認識で止まってしまっている気がします。

東近江市社協の場合、生活支援体制整備事業は、介護と地域福祉の担当部署が一緒に考えることがあるのですが、地域共生社会を見据えた場合は、生活困窮者自立支援のつながりがもっと活かされるのではないかと考えています。困窮者が地場産業の担い手になったり、維持する活動をしたり、分野を超えてできたことから学ぶ面は多いはずです。

吉田 大分県は、2年前から地域共生社会の人材育成に取り組んでいます。社協、生活支援コーディネーター、生活困窮者自立支援、地域包括支援センター、権利擁護など、さまざまな部署から人選し、最終的には、その担当者がチームで取り組めるようになればいいなと思っています。

この事業は、包括化推進員を育成することが目的ではなく、自分たちが今置かれている立場から地域共生社会を理解することを主眼に置いています。それは、自分の役割が何かを考えること、ほかのコーディネーターやいろいろな立場の人を知ることでもあり、それを知ることが、自分

にできることの幅を少し広げて考えることにつながります。余力を広げ、つながるという意識が生まれると、いろいろなことに応用できる場ができます。たとえば、地域ケア会議で上がってくる身元保証人の課題を、高齢部門だけでなく、障害者自立支援部門でも考えたり、働きづらい人たちがいる一方で企業と

のマッチングを行う生活困窮者自立支援のノウハウが、80歳の元気高齢者の「働きたい」を応援することにもつながり、障害、高齢、企業との場づくりが広がります。これこそが、今回の交流・研修事業を「地域づくり」というキーワードで集めた意義と考えています。

高橋ひ その人が地域で暮らしていくために必要な理解を深めるきっかけづくりを、さまざまな立場から広めていくことが必要だと思います。コーディネーターが地域と関わり、関わった先でもっと広げていかないと、まだまだ地域共生社会にはたどり着きません。

眞弓 地域共生社会とは、サービスや仕組みをつくればいいという話ではありません。そこで一人の人が暮らしていくということです。

東京会場で厚生労働省社会・援護局の國信綾希さんが示してくれた図は、なぜつながる必要があるのかを示されています。課題に対応をしていくと、つながることも必然となってきます。（図表3）

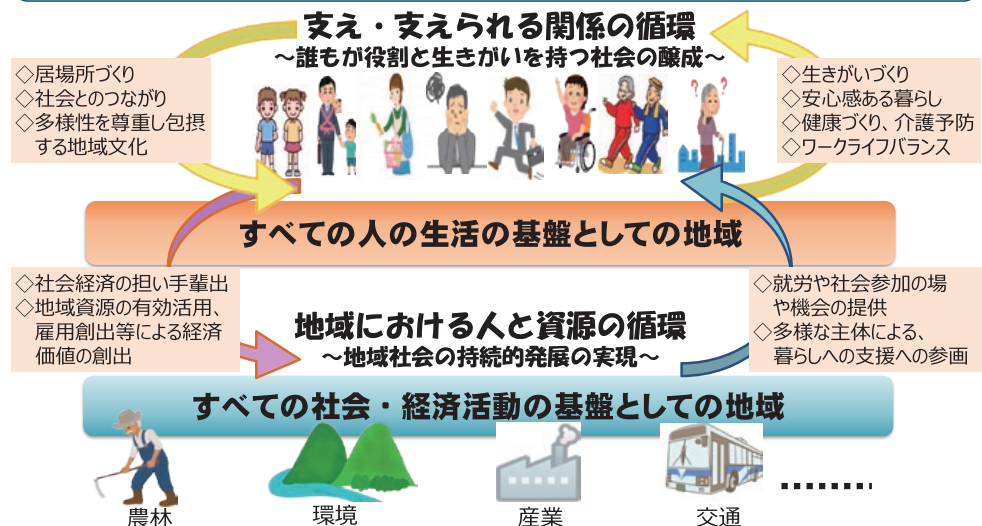
吉田 そこに気づくのが、地域づくりに関わるコーディネーターですね。

高橋せ ありがとうございます。

<図表3>

地域共生社会とは

◆制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、**住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会**



参加者の状況と交流・研修事業の評価

1 参加申し込み状況

(単位：人)

北海道	1	茨城県	9	新潟県	3	三重県	16	鳥取県	0	徳島県	2	福岡県	28
青森県	1	栃木県	10	富山県	3	滋賀県	9	島根県	2	香川県	0	佐賀県	3
岩手県	0	群馬県	2	石川県	2	京都府	10	岡山県	7	愛媛県	1	長崎県	4
宮城県	1	埼玉県	5	福井県	0	大阪府	9	広島県	2	高知県	2	熊本県	2
秋田県	0	千葉県	8	山梨県	1	兵庫県	9	山口県	1			大分県	1
山形県	0	東京都	21	長野県	2	奈良県	1					宮崎県	2
福島県	2	神奈川県	3	岐阜県	7	和歌山県	3					鹿児島県	1
				静岡県	5							沖縄県	2
				愛知県	23								

2 研修・交流会会場アンケート結果

大 阪 (回答数 42 人、参加者数 54 人)

福 岡 (回答数 38 人、参加者数 43 人)

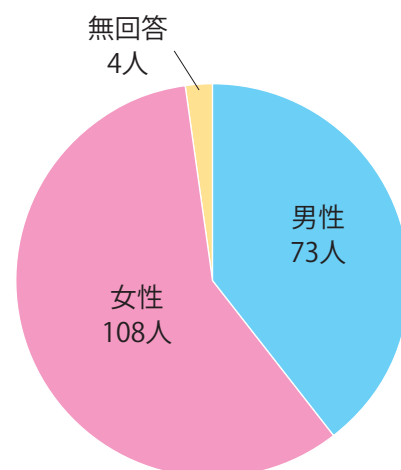
東 京 (回答数 60 人、参加者数 72 人)

名古屋 (回答数 45 人、参加者数 51 人)

①性別

(単位：人)

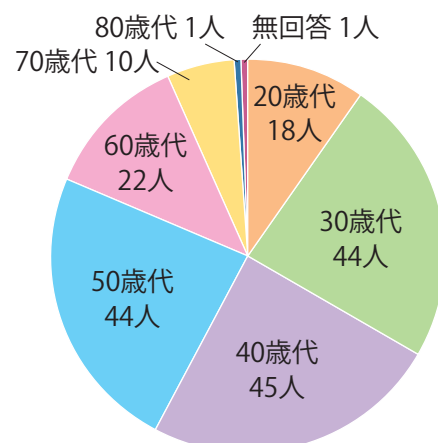
	大 阪	福 岡	東 京	名古屋	計
男 性	16	15	21	21	73
女 性	25	22	37	24	108
無回答	1	1	2	0	4
合 計	42	38	60	45	185



②年代

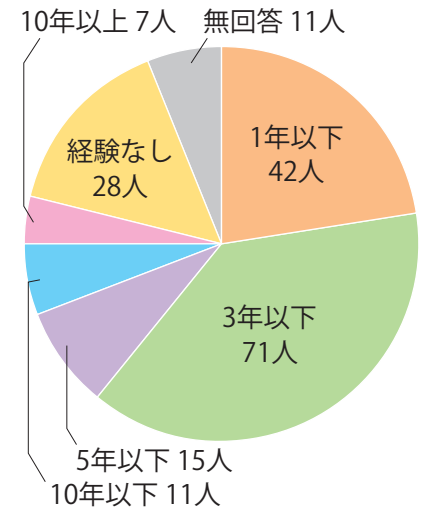
(単位：人)

	大 阪	福 岡	東 京	名古屋	計
20歳代	3	4	4	7	18
30歳代	5	14	19	6	44
40歳代	13	9	11	12	45
50歳代	11	8	17	8	44
60歳代	6	3	8	5	22
70歳代	3	0	1	6	10
80歳代	0	0	0	1	1
無回答	1	0	0	0	1
合 計	42	38	60	45	185



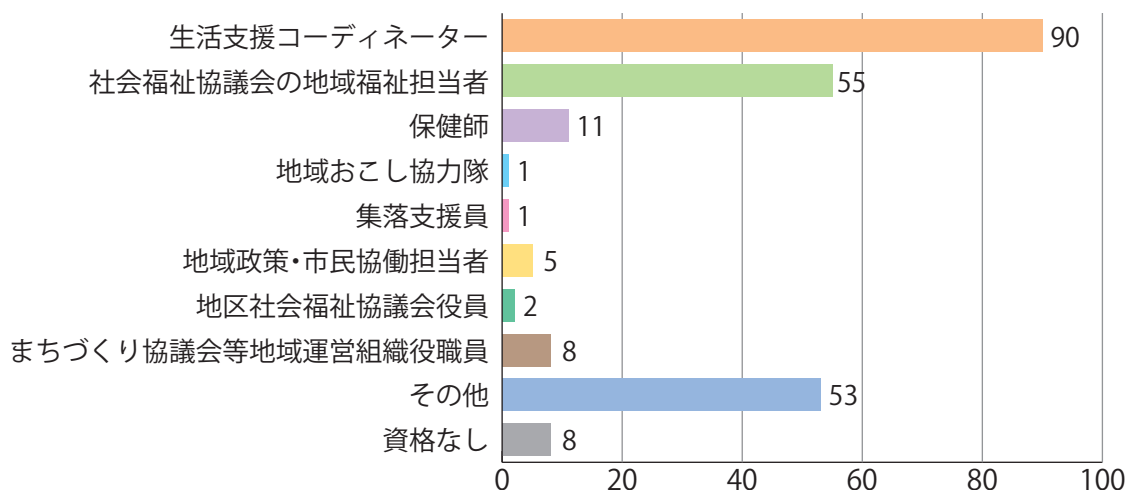
③福祉・介護関連就業総年数 (単位：人)

	大阪	福岡	東京	名古屋	計
1年以下	6	6	20	10	42
3年以下	18	18	20	15	71
5年以下	2	4	4	5	15
10年以下	4	1	3	3	11
10年以上	2	2	2	1	7
経験なし	6	5	9	8	28
無回答	4	2	2	3	11
合 計	42	38	60	45	185



④職種・資格（複数回答あり） (単位：人)

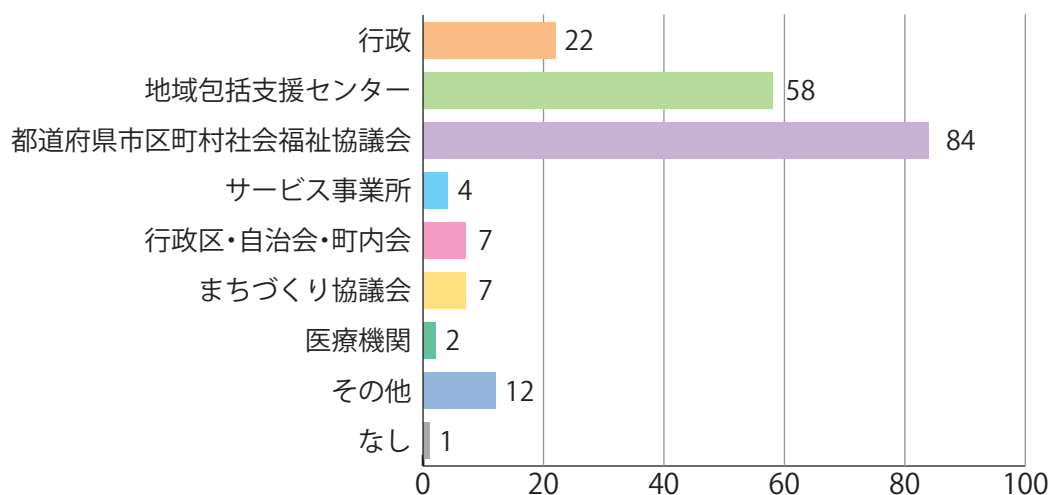
	大阪	福岡	東京	名古屋	計
生活支援コーディネーター	15	22	33	20	90
社会福祉協議会の地域福祉担当者	12	12	16	15	55
保健師	3	1	5	2	11
地域おこし協力隊	0	0	0	1	1
集落支援員	1	0	0	0	1
地域政策・市民協働担当者	2	2	1	0	5
地区社会福祉協議会役員	0	0	1	1	2
まちづくり協議会等 地域運営組織役職員	2	0	0	6	8
その他	6	8	20	19	53
資格なし	4	1	2	1	8
合 計	45	46	78	65	234



⑤所属

(単位：人)

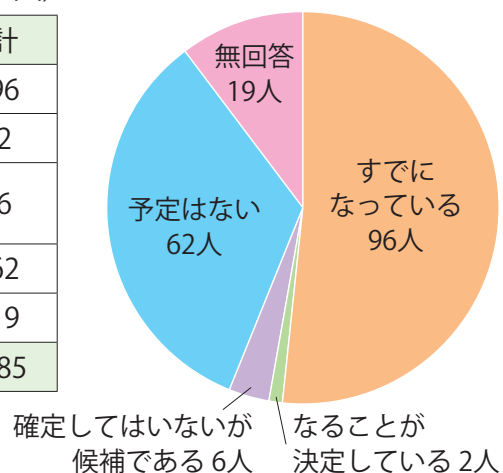
	大 阪	福 岡	東 京	名 古 屋	計
行 政	4	7	9	2	22
地域包括支援センター	12	11	24	11	58
都道府県市区町村社会福祉協議会	24	18	21	21	84
サービス事業所	0	3	0	1	4
行政区・自治会・町内会	1	1	0	5	7
まちづくり協議会	2	0	1	4	7
医療機関	0	1	1	0	2
その他	1	0	4	7	12
な し	1	0	0	0	1
合 計	45	41	60	51	197



⑥生活支援コーディネーター

(単位：人)

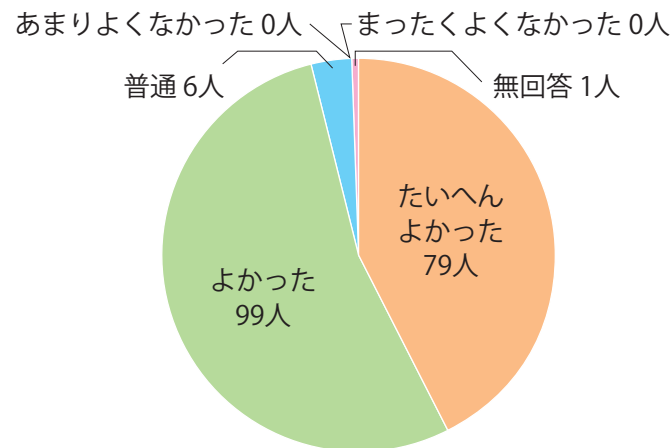
	大 阪	福 岡	東 京	名 古 屋	計
すでになっている	18	22	34	22	96
なることが決定している	0	1	1	0	2
確定してはいないが候補である	1	1	4	0	6
予定はない	16	13	16	17	62
無回答	7	1	5	6	19
合 計	42	38	60	45	185



⑦研修・交流会に参加されてよかったですか

(単位：人)

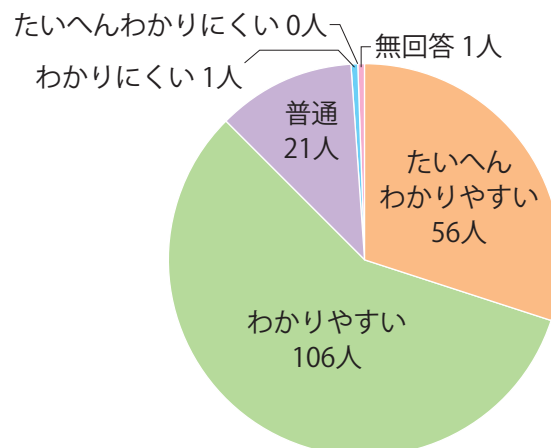
	大阪	福岡	東京	名古屋	計
たいへんよかった	16	18	31	14	79
よかった	24	19	27	29	99
普通	2	1	1	2	6
あまりよくなかった	0	0	0	0	0
まったくよくなかった	0	0	0	0	0
無回答	0	0	1	0	1
合 計	42	38	60	45	185



⑧研修・交流会の資料はわかりやすかったですか

(単位：人)

	大阪	福岡	東京	名古屋	計
たいへんわかりやすい	13	13	16	14	56
わかりやすい	25	22	35	24	106
普通	4	3	7	7	21
わかりにくい	0	0	1	0	1
たいへんわかりにくい	0	0	0	0	0
無回答	0	0	1	0	1
合 計	42	38	60	45	185



地域づくりに関わるコーディネーターのための研修・交流会 プログラム

10:00-10:10 開会

10:10-11:00 鼎談「いま地域から求められるコーディネーターとは」

地域づくりは、制度としてトップダウンはできません。コーディネーターに求められる姿勢や地域との関係づくりについて、熱く語り合います。

登壇者

託老所あんき・縁側プロジェクト（愛媛県）代表 中矢暁美／東北福祉大学総合マネジメント学部教授 高橋誠一／宮田村（長野県）福祉課福祉係係長 山下孝一（大阪会場）／多賀城市（宮城県）保健福祉部介護福祉課介護予防係主幹兼係長 高橋洋之（福岡会場）／松戸市（千葉県）市民部市民自治課参事監兼課長 宮間恵美子（東京会場）／東近江市（滋賀県）総務部まちづくり協働課主事 溝江麻衣子（名古屋会場）

11:05-12:35 実践報告「地域づくりの実際と工夫」

地域づくりには、分野も制度も関係ない！そこに流れる、たっぴりの工夫と信念を、3人のコーディネーターの実践報告から学びます。

登壇者【パネラー】

阪南市社会福祉協議会（大阪府）事務局次長兼地域福祉グループ主任 猪俣健一（大阪会場）／福島市飯坂南地域包括支援センター（福島県）所長（生活支援コーディネーター統括） 齋藤理恵（大阪会場）／NPO法人とかの元気村（高知県）副理事長兼コーディネーター 森田有紀（大阪会場）／久万高原町社会福祉協議会（愛媛県）面河支所 福祉活動専門員兼第2層生活支援コーディネーター 西森友紀（福岡会場）／一宮市地域包括支援センターコムネックスみづほ（愛知県）主任ケアマネジャー兼第2層生活支援コーディネーター 谷口正和（福岡会場）／NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝（大阪府）事務局長 池谷啓介（福岡会場）／合志市社会福祉協議会（熊本県）事務局長 齋藤正治（東京会場）／広島市基町地域包括支援センター（広島県）センター長 藤谷周志（東京会場）／埴山学区住みよいまちをつくる会（茨城県）会長 西村ミチ江（東京会場）／文京区社会福祉協議会（東京都）地域福祉推進係地域連携ステーション（フミコム）係長 浦田愛（名古屋会場）／肝付町（鹿児島県）福祉課参事兼包括支援係長 保健師 能勢佳子（名古屋会場）／NPO法人すずの会（神奈川県）代表 鈴木恵子（名古屋会場）

登壇者【コーディネーター】

宝塚市社会福祉協議会常務理事 佐藤寿一（大阪・福岡会場）／東近江市社会福祉協議会在宅福祉課課長 眞弓洋一（東京会場）／中津市社会福祉協議会（大分県）地域福祉課課長 吉田瑞穂（名古屋会場）

12:35-13:30 休憩／ランチ交流タイム

13:30-14:50 演習1／実践発表を聞いた感想・気づきを共有しよう

14:50-15:30 セッション「地域住民とコーディネーターが紡ぐ地域共生社会」

登壇者【パネラー】

厚生労働省社会・援護局地域福祉課地域福祉専門官 玉置隼人（大阪・福岡会場）／東近江市社会福祉協議会在宅福祉課課長 眞弓洋一（大阪会場）／NPO法人とかの元気村副理事長・コーディネーター 森田有紀（大阪会場）／宮田村福祉課福祉係係長 山下孝一（福岡・東京・名古屋会場）／厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室企画調整専門官 國信綾希（東京会場）／農林水産省大臣官房政策課課長 山口靖（東京会場）／厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室兼地域共生社会推進室室長 吉田昌司（名古屋会場）

登壇者【コーディネーター】

東北福祉大学総合マネジメント学部教授 高橋誠一（大阪会場）／NPO法人全国コミュニティライフサポートセンター理事長 池田昌弘（福岡・東京・名古屋会場）

15:45-16:25 演習2／コーディネーターに求められること

16:25-17:10 まとめ

登壇者

東北福祉大学総合マネジメント学部教授 高橋誠一／厚生労働省社会・援護局地域福祉課 地域福祉専門官 玉置隼人（大阪会場）／東近江市社会福祉協議会在宅福祉課課長 眞弓洋一（大阪会場）／NPO法人とかの元気村副理事長・コーディネーター 森田有紀（大阪会場）／宝塚市社会福祉協議会常務理事 佐藤寿一（福岡・東京・名古屋会場）／厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室企画調整専門官 國信綾希（東京会場）／農林水産省大臣官房政策課課長 山口靖（東京会場）／厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室兼地域共生社会推進室室長 吉田昌司（名古屋会場）

17:10-17:15 閉会

17:45- 懇親会

※会場によって、プログラムを調整しています

事業開催日程

2019年 6 月 1 日 土	第 1 回運営委員会 場所：全国コミュニティライフサポートセンター京都事務所（京都市南区）
2019年 8 月 17 日 土	地域づくりに関わるコーディネーターのための研修・交流会 at 大阪 場所：ハートンホール毎日新聞ビル サフラン（大阪市北区） 参加者数：54人
2019年 8 月 18 日 日	第 2 回運営委員会 場所：ハートンホール毎日新聞ビル ガーベラ（大阪市北区）
2019年 11 月 24 日 日	地域づくりに関わるコーディネーターのための研修・交流会 at 福岡 場所：天神ビル 10号会議室（福岡市中央区） 参加者数：43人
2019年 12 月 14 日 土	地域づくりに関わるコーディネーターのための研修・交流会 at 東京 場所：ビジョンセンター永田町 ビジョンホール（東京都千代田区） 参加者数：72人
2019年 12 月 15 日 日	地域づくりに関わるコーディネーターのための研修・交流会 at 名古屋 場所：AP名古屋. 名駅 B + C + D 会議室（名古屋市中村区） 参加者数：51人
2020年 1 月 12 日 日	運営委員会作業部会 場所：ワンコイン会議室名古屋 名古屋東口会議室 B（名古屋市中村区）
2020年 2 月 1 日 土	第 3 回運営委員会 場所：全国コミュニティライフサポートセンター京都事務所（京都市南区）

運営委員名簿

委員長	高 橋 誠 一	東北福祉大学総合マネジメント学部 産業福祉マネジメント学科 教授
委員	高 橋 洋 之	宮城県・多賀城市保健福祉部介護福祉課介護予防係 主幹兼係長
委員	山 下 孝 一	長野県・宮田村福祉課福祉係 係長
委員	眞 弓 洋 一	滋賀県・東近江市社会福祉協議会 在宅福祉課 課長
委員	佐 藤 寿 一	兵庫県・宝塚市社会福祉協議会 常務理事
委員	中 矢 暁 美	愛媛県・託老所あんき・縁側プロジェクト 代表
委員	吉 田 瑞 穂	大分県・中津市社会福祉協議会地域福祉課 課長
委員	池 田 昌 弘	全国コミュニティライフサポートセンター 理事長

事務局 全国コミュニティライフサポートセンター

小野寺知子・堀切明美・田所英賢・宇城絵美・田村洋介・鈴木久美子・渡辺歩美・及川淑恵
・伊藤慶充（同志社大学社会学部社会福祉学科 4 年）

2019 年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業
「地域づくりに関わるコーディネーターの交流・研修事業」報告書
地域づくりに関わるコーディネーターがたいせつにしていること

発行日：2020 年 3 月 24 日

マンガ：高 垣 知 子（スプラウトデザイン）

発 行：特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター
〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町 16-30 シンエイ木町ビル 1F
TEL：022-727-8730 FAX：022-727-8737
<http://www.clc-japan.com>

印 刷：大倭印刷株式会社